

白神山地の山林では、何世紀にもわたって伐採が生活の一部となってきた。この地域の木材産業は衰退しているが、地域の文化へは今も広く影響している。

地域の方言で「杣夫」として知られている木こりは、何世紀にもわたってこの地域の森林で働いてきた。鉄道が登場する前、彼らは山から巨大な丸太の束を手で引き下ろす、バジソリと呼ばれる方法を用いたり、あるいは馬ぞり（ドンビキと呼ばれる）を引いて丸太を運んでいた。1911年には木材をより簡単に運ぶために最初の線路が建設され、1940年代初頭まで線路が積極的に拡張された。残念ながら、1963年の深刻な洪水により多くの線路が流されてしまい、その後、廃線となった。現在では、木材は通常、クレーンでトラックに積み込まれる。

木こり職人たちに加えて、昔から存在する熊のハンター（マタギ）も木を伐採していた。マタギの信仰や習慣は宗教的な部分があり、自分たちが狩るクマやニホンカモシカを山の神々の贈り物だと考えている。マタギの人口は高齢化と減少を続けており、マタギ文化は、観光客向けに組まれたツアーを通じて保護されている。

地域の森林には約 100 種の樹木が生えているが、いつも秋田の木材産業は、秋田スギと呼ばれているスギが中心となってきた。ヤマザクラ（強度と光沢のあるつやで高級な建築に使用される）、クリ（耐水性があるため建設や家具に使用される）、ウダイカンバ（ピアノや飛行機のプロペラに使用される）、マンシュウグルミ（高級家具やフローリングに使用される）も収穫される。

ふるさと自然公園センターは、素波里湖の東岸にある郷土博物館とインフォメーションセンターであり、杣夫の伝統的な道具や、森での仕事の様子を描写した動画や画像を展示している。センターには、無料の Wi-Fi とリモートワーク用に設計されたプライベートスペースもある。